フジクラの「“つなぐ”テクノロジー」特集号に寄せて

取締役専務執行役員　加藤隆昌

フジクラ技報は発刊以来 62 年を経過し，今回の特集号を以て 123 号を数えます．この間フジクラ技報は，当社の研究・開発活動の成果を，同分野で活躍する学究の徒に，その先進性・斬新性などをアピールするとともに，社会のインフラを担う製品を供給する企業として，その高度化・高信頼化などへの貢献について社会に発信してきました．

当社は創業以来 120 有余年を経ますが，120 周年を迎えた 2005 年に人の還暦が 60 年毎であることにあやかり，これ以降の企業活動を“第 3 の創業”と謳うと共に，弊社が活動する技術領域を「“つなぐ”テクノロジー」と総括し，この技術領域で新たな製品・事業の創成を宣言しました．このような経緯から「“つなぐ”テクノロジー」は，当社が有するすべての技術を総括する総称的な意味となっています．

本特集号では，これらフジクラの「“つなぐ”テクノロジー」で創出された，技術・製品を網羅的に紹介させていただくことにしました．今回，私なりの「“つなぐ”テクノロジー」の解釈と将来への期待を披露させていただくことで“第 3 の創業”の主旨と，本特集号の発行の意義を合わせてご理解いただきたいと思います．

当社は明治 18 年（1885 年）2 月創業者である藤倉善八が，絹・綿巻線の製造に乗り出したことにはじまりました．この時期は我が国において，電気機器に使用する巻線や通信用の銅線材を製造する電線産業の夜明けの時期に当たります．以来，当社は電線ケーブルの専業メーカとして，電力・通信の分野で，その大容量化・高度化に対応する数々の技術を結実させてきました．この歴史からすれば，“つなぐ”とは，銅を材料とする“電線”とのイメージが容易に湧き起こります．

確かに，“つなぐ”の由来は，“電線”に違いないのでしょう．しかし，当社は通信・電力等の分野で技術革新の推進役として，電線とは一線を画する製品を創出してきました．一つは，銅に代って石英ガラスで構成される光ファイバの開発・実用化であり，現代のインターネット社会を支える通信革命に大きく貢献しました．そして，エレクトロニクス分野においても，フレキシブルプリント配線回路をはじめとする，斬新な技術・製品を生み出し，スマートフォン・タブレット端末の普及に貢献しています．

これらの製品は電線と同じように，人と人，人と社会を“つなぐ”役割を果たしておりますが，これらに係る技術基盤は，旧来の電線とは大きく異なります．電線に関する旧来の技術だけでなく，これらの新規の製品を創出した技術群が，まさしく「“つなぐ”テクノロジー」であると思います．

この技術群とは，長年にわたり一人一人の技術者が，ものづくりの分野で継続的に学習した問題解決能力や経験知が無形の資源としての組織能力となった「積み重ね技術」[1] なのだと思います．無論，これらの技術は電力・通信・半導体工学，金属工学，有機・無機材料工学，制御・機械工学などの科学技術に裏付けされたノウハウであり，経験知なのです．この「積み重ね技術」を，世代を超えて継承し“つないで”いくこと，そして，継続的に新たな製品を生み社会に貢献し続けることこそが，第三の創業であり「“つなぐ”テクノロジー」の真骨頂であると考えます．

蛇足かもしれませんが“つなぐ＝繋ぐ”には，結びとめる，続け合わせる，長く続け絶えさせない，との意味に加え，ひきつける，ほだす（絆す）との意味があります．「“つなぐ”テクノロジー」には，顧客を絆し，魅了してやまない技術・製品を創出し続けることへの期待が，強く込められています．本誌にて紹介する製品・技術が，顧客に，社会に受け入れられ，21 世紀のさらなる社会の発展に貢献できることを願って止みません．

本特集号を発刊するに当たり，各界の皆様に改めて御礼を申し上げるとともに，旧来以上のご指導，ご鞭撻をお願い申し上げます．

1)「積み重ね技術の重要性」 延岡健太郎：一橋ビジネスレビュー　2011 SPR.